

回顧録

Reminiscences

ひるま矯正歯科
院長・晝間登喜男



写真は20数年続けた保育園の園医としての最後の健診風景(2008年12月)。長きにわたって園児を診ていると、口の中を見るだけでその子の家庭環境を推測できることがあります。家庭での歯磨き習慣や食生活の改善が必要な園児には、往々にして忙し過ぎる母親や複雑な事情を抱えた家庭の子が多く、一歯科医が踏み込む領域を越えて無力感に襲われることもありました。昔と違って多発性汎汎性のむし歯の子はほとんどいなくなりましたが、乳歯のうちから叢生(デコボコ)や開咬、交叉咬合など矯正の問題を持つ子が増えています。その原因は複合的で明確にはまだ分かっていません。

与五沢矯正研究会、発足

今は当たり前のマルチブラケット法(一本一本の歯にブラケットを装着しワイヤの弾性で歯を移動する矯正法)ですが、日本ではまだ試行錯誤の中にあつた1970年代、本場アメリカで研鑽を積んだ与五沢文夫先生が自院を開放して講習会を開きました。次第に受講希望者が増えその講習会が定例になり出した1979年、「与五沢矯正研究会」が発足しました。その

織田紘太郎先生とAAO

大学の同門であり開業の面でも先輩だった織田紘太郎先生は、旅行好きで交際範囲も広かつたことから何回となくAAO(アメリカ矯正歯科学会総会)にお供させてもらいました。いつも往き帰りの飛行機だけ抑えて、あとは現地レンタカーを借りホテルは適当な所を探しては電話で予約する旅でしたので、疲れますが行くたびに自信がついていく旅でした。はじめのAAOはアトランタでした。学会ではもっぱら症例提示と商社展示を見て回っていました。夜はDr.スエヒロ(第1回に登場)が連日われわれを接待してくれ、ことのある晩などは日本から来たF教授夫妻とイリノイ大学に留学中だったD教授とともに、観光客では知りようのないレストランで現地の食事を馳走にたつたりしました。その2年後、Dr.スエヒロが急逝



函館で開かれた研究会(1992年)の一コマ。牧場でのBBQパーティーでスタッフと談笑する両川弘道先生(中央)。いまでも親交の深い矯正医仲間の一。



AAO(1993年モントリオール)の宿泊先で。話し疲れてくつろいだ格好の中村勝彦先生(左)と織田紘太郎先生(右)。二人とも今はもう亡い。



1994年当時のスタッフ。よく働きよく遊びよく飲みよく歌った彼女たちは皆8年以上勤務し寿退社しました。



移転前のひるま矯正歯科の玄関(5F)。延べ何人の患者さんがこのドアを入り出したことか。今でもこの前に立つと30年前の開業初日の感慨がよみがえります。

後20数年間にわたり深く関わることになるこの研究会は、私の矯正医人生にもっとも強く影響を与えました。

29名の会員から始まった研究会ですが、発足5年目、新設部門の責任者に指名され、その後10年以上にわたり研究会の中核で企画・運営の総指揮を執ることになります。職務は多忙を極めました。今になってみればそのすべてが矯正歯科医としての血となり肉となったように思います。

されたのは私たちにはもちろん日本の矯正歯科界にとっても大きな損失でした。その後、織田先生と何度かAAOに参加しサンフランシスコ、ラスベガス、シアトルなどを歴訪しましたが、その後母校の教授になるI君が留学中のワシントン大学で、主任教授のDr.ライデルから聴講を許され一日大学院の講義を受講できたことは得難い経験でした。

1993年モントリオールで開かれたAAOには、中村勝彦先生ご夫妻、織田先生ご夫妻そして当方の夫婦3組で参加しました。中学生と高校生の子供二人を義理の母に託して家内にとつては初めての海外旅行でした。英語が堪能で博識の中村先生(カッチャン)を輪にしての旅行は実に思い出深いものでしたが、そのカッチャンは昨年6月秋葉原の無差別殺人事件に巻き込まれて無残な死を遂げ、それに先立つ6年前、織田先生は不治の病で還暦を待たず

この世を去りました。

矯正歯科臨床医として

2002年2月、IT社会を実感し当院もホームページを立ち上げました。その中に質問コーナーを開設し、そこへの投稿から世の中に矯正歯科治療で悩んでいる人がいかに多いか、へいかにいい加減な矯正治療が多いかを知られ驚きました。2004年4月、これまでに新潟大学の矯正歯科教室で研鑽を積んでいた後継者が帰京、8月に自らの計画にそつた新しいひるま矯正歯科をオープンしたとき矯正歯科臨床医としての終焉を心に決めましたが、7年間にわたる質問コーナーへの回答書きは臨床家としての有終に相応しい仕事だったと一人得心しています。(完)

数々の研究会の中で第10回の記念大会(88年)と函館で開催した第14回大会(92年)は特に心に残っています。10周年記念大会では、ホテルオークラのメインホールを借り切った一大イベントを会長の両川弘道先生と企画しました。当日は大学の教授以下全国から500余名の矯正歯医が集まる盛況をみせ、他の研究グループに多大な影響を与えたと評されました。大会後のニュースレターに与五沢先生は「今回の講演は私の人生にとつてもっとも責任ある仕事」でありこれだけの責任ある講演は今迄になく恐らくこれからもないと思う」と書いています。かくして、両川先生と心血を注いでプロデュースした大会は大成功裡に終わりました。第14回大会は会場を函館に移し、開催日を一日増やし中日をレジャーに費やす日程を組んだことで記憶に残る楽しい大会になりました。ことに牧場を借り切り、生ビールを飲みながら馬を走らせた北海道らしい遊びは、いま思えばバブル全盛期だからこそできた企画でした。与五沢矯正研究会は今も続いています。後輩たちに道を委ねて23回をもって会を引退しました。この23年間に得た知友とは今も親交を重ねており私の宝物の一つになっています。